

フェヒナーにおける光明観と暗黒観の相克：グスタフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（5）

福元，圭太
九州大学大学院言語文化研究院：教授：現代ドイツ文学・思想

<https://hdl.handle.net/2324/1398517>

出版情報：かいろす．（51），pp.18-39，2013-12-01．かいろす同人
バージョン：
権利関係：



フェヒナーにおける光明観と暗黒観の相克

— グスタフ・テオドール・フェヒナーとその系譜 (5) —

福 元 圭 太

0. 序

1. 『光明観と暗黒観の相克』 — その成立経緯

2. 光明観と暗黒観

以下次稿に続く

0. 序

本稿の目的は、グスタフ・テオドール・フェヒナー（1801-1887）晩年の著作、『光明観と暗黒観の相克』（*Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht*, 1879）¹⁾を解説し、祖述することで、フェヒナーの思想全体を俯瞰する点にある。この著作は、それまで「多くの著作でばらばらに発表してきた哲学的・宗教的な見解を、一個の独立した著作としてまとめたい」²⁾というフェヒナー自身の動機に貫かれたものである。ある論者によれば『光明観と暗黒観の相克』は、フェヒナーのそれまでの哲学的著作を読む労を「まさに省いてくれるような」(*geradezu erspart*)³⁾著作なのである。

これまで論者は——その「労」を省くことなく——フェヒナーのいくつかの哲学的・宗教的著作⁴⁾を年代順に論じてきた。フェヒナー思想の総まとめの感がある『光明観と暗黒観の相克』を扱う本稿ではしたがって、論者がこれまでの論文で取り上げてきたフェヒナーのさまざまな主張が、再度吟味されることになる。「フェヒナーの思想全体を俯瞰する」ことを本稿の目的に挙げたのも、それが『光明観と暗黒観の相克』読むことで可能になると考えるからである。

1. 『光明観と暗黒観の相克』 — その成立経緯

1879年の春、Breitkopf und Härtel社から上梓された『光明観と暗黒観の相克』の成立経緯は、やや複雑である。先行研究によればフェヒナーは、1871年あたりからある哲学者の著作に対する反論を書き始めていたらしい⁵⁾。

すなわち、エドゥアルト・フォン・ハルトマン (Eduard von Hartmann 1842-1906) の『無意識の哲学』(*Philosophie des Unbewussten*. Berlin 1869) に対してである。フェヒナーが何に対して反論したのかを理解するために、その内容を素描してみよう⁶⁾。

普仏戦争期から泡沫会社時代 (Gründerzeit) にかけてベストセラーとなった『無意識の哲学』⁷⁾ は、カントの批判哲学やヘーゲルらの思弁哲学における理性の偏重を排し、「無意識的なもの」(das Unbewusste) を唯一の形而上学的原理として措定している。ハルトマンの思想の特徴は、無意識を二つのカテゴリーに分けている点にある。すなわち、「無意識的な理性ないし表象」と「無意識的な意志」が措定されているのである。後者の「無意識的な意志」は、ショーペンハウアーの盲目的意志 (Wille) に類似した概念であるが、同時に「無意識的な理性ないし表象」が承認されている点に、ショーペンハウアーとの本質的な相違がある。ハルトマンはつまり、理性もまた無意識の産物であるとするのである。

ハルトマンはまた、形而上学的な思考に当時最新の自然科学の成果を取り入れようとし、とりわけ生物学・進化論を重視した。たとえば「無意識的なもの」として、人間の本能や反射運動、またその自然治癒力などが挙げられている。ハルトマンの帰納法的な説明や、形而上学的な思考の自然科学による補強、さらには目的論 (Teleologie) への傾きは、フェヒナーと似たところがある。見かけの類似性にもかかわらず、ハルトマンがフェヒナーと大きく違っている点は、その厭世主義的な世界観にある。

ハルトマンはヘーゲルの歴史哲学に倣い、歴史の目的についても考察している。ハルトマンによれば、歴史の第一期、人類の少年時代 (ギリシア時代) には、幸福は現世において到達可能であるという幻想がもたれた時代であった。第二期、人類の青年時代 (中世) には、幸福は死後において達成されるという妄想がもたれた。第三期、人類の壮年時代である現在においては、幸福は再び地上で得られると考えられているが、それはもはや現在の個人によってではなく、将来の社会制度の改革や道徳の改善によってもたらされるであろうとされる。しかしこれも幻想であることに変わりはない。将来、人類が老年期に達すると、幸福よりはむしろ苦痛のない状態のほうが望まれるに至るであろう。それはすなわち、「解脱としての死」なのであるが、ショーペンハウアーのようにそれを静寂主義的に待つのではなく、このような老年期に早く到達するよう努力すべきである——これが

ハルトマンの歴史認識の結論なのである⁸⁾。進化論的な時間軸にそって進む世界の進行に積極的に参加し、人類が老年に至る速度をはやめることを是とするハルトマンは、ここでペシミズムをオプティミズムに転換しようとする。つまり、悲観的な目標に楽観主義的に邁進しよう、ことばを補うなら、個人の幸福の追求という観点からは悲観的であっても、それは人類の進化発展という観点からは楽観的な目標なのだから、それに邁進しようと言うのである。

ハルトマンによれば、存在が苦痛に満ちているのは、それが「無意識的な意志」によって定立されているが、まさにその意志が非理性的で盲目的であるからだ。このような「無意識的な意志」によって現実化された「無意識的な表象」は、やがて個体化を通じて個別的意識を生む。ハルトマンは意志＝自然、意識＝人間的理性と考えていると言ってよいであろう。意識の発達とは、表象や理性が意志から解放され、独立し、やがて意志そのものに反逆する過程であるにとらえられる。ただし繰り返せば、意識と意志はともに「無意識なるもの」である自然から派生したものであるという点が、ハルトマン哲学の独自な点である。このようにして自然の自己認識、つまり意識の発達が極限に達したときに、自然そのものは否定されることになる。

ハルトマンにとって発達した意識の産物である文化、道德、信仰などは、それら自身を否定するための手段に過ぎなかった。このような「無意識的なもの」の自動運動においては、神の存在、ひいては魂の不滅という考え方も放棄される。

個々人がすでに馴染みの能力だけでやっていけるというのに、何のために超越的な神を持ち出さなくてはならないのであろう（... wozu denn noch einen transcendenten Gott in's Spiel bringen, wo das Individuum mit den uns bekannten Fähigkeiten allein fertig werden kann.）⁹⁾

ハルトマンにとって歴史は、「心理的な法則にしたがって決定づけられている個々の人間の自己活動の結果であって、より高い諸力の介入という奇蹟はそこにはない」（Resultat der Selbstthätigkeit der nach psychologischen Gesetzen sich selbst bestimmenden Individuen ohne jedes Wunder eines Eingriffs höherer Mächte）¹⁰⁾ のである。

フェヒナーとハルトマンの違いは、後者の究極的にはペシミスティックな世界観、神の否定、それに伴う魂の不死の否定、また特にその意識 (Bewusstsein) の位置づけにある。後述するようにフェヒナーにとって意識とは、より高度で包括的な神の意識が分与されたものに他ならなかった。しかるにハルトマンの意識は、盲目的な無意識的意志に完全に従属しているととらえられているのである。

1873年に一応のところまとめられた反ハルトマン論の草稿タイトルは、『意識の光明観と暗黒観の相克』(*Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht des Bewusstseins*) であった¹¹⁾。1873年4月9日付の日記の中で、目下執筆中の原稿を列举する中に、この草稿のことも書かれている。

[...] ハルトマンの無意識の説に対する論駁書 (Gegenschrift) で、『意識の光明観と暗黒観の相克』というタイトルの一書 [...] ¹²⁾

1879年の著書とタイトルが酷似しているこの草稿はしかし、後の『光明観と暗黒観の相克』の原型となったと言うことはできない。その後この草稿にはさまざまな加筆修正が施されたが、結局のところ『光明観と暗黒観の相克』には「せいぜいのところ [...] 部分的に」(bestenfalls [...] partiell) ¹³⁾ 取り入れられただけであると考えられる。というのも、『光明観と暗黒観の相克』の原稿を出版社に渡した日の日記 (1878年10月18日付) には、その成立経緯を振り返りながら、ハルトマンへの論駁書のことが次のように記されているからである。

主としてハルトマンに対する反論を述べた2部からなる本は、かなり出来上がっていた。しかし、それに注いだ辛苦にもかかわらず、私はこの論敵に反論したところで何になるだろうと自分に言い聞かせ、草稿のすべてを投げ出した (in den Scat legen) ¹⁴⁾。

『光明観と暗黒観の相克』成立に関わる、おそらくはより重要な著作としてアーレントは、ゴットヒルフ・ハインリヒ・シューベルト (Gotthilf Heinrich Schubert 1780-1860) の講義録『自然科学の夜の側面についての見解』(*Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft*. 1808) を挙げている。シューベルトは周知のように、ローレンツ・オーケン (Lorenz Oken

1779-1851), ヘンリヒ・シュテッフェンス (Henrich Steffens 1773-1845), カール・グスタフ・カールス (Carl Gustav Carus 1789-1869) らとならぶロマン主義的自然研究の大物であり、フェヒナーはこの講義録を学生時代に読んでいたようである。ただしシューベルトの考える「夜の側面」(Nachtseite)とフェヒナーの「暗黒面」(Nachtsicht) が同じことを言っているのではないこと、むしろ逆の内容をもつことにアーレントは触れていないので、注意を要する。

近代的な自然科学が「内的世界」(die innere Welt) を感得しようとしないうことを、シューベルトが自然科学の「夜の側面」と考え、その考え方をフェヒナーも共有しているので、フェヒナーがシューベルトから影響を受けた、というわけではない。まったく正反対である。シューベルトにとっては啓蒙的な理性によって照らし出された自然の側面、つまり近代自然科学の対象となった自然がいわば「昼の側面」(Nachtseite に対しては Tagesseite となるであろう) であり、そのようなものからこぼれ落ちる、理性の範疇では捕捉しがたい神秘的な自然、理性からは迷信や病気の領域へと追いやられるような自然が「夜の側面」なのである。ここには予言や啓示、透視や夢¹⁵⁾、魔術等のオカルト的なもの、さらにはいわゆる「メスメリズム」(動物磁気治療法) などが含まれる。シューベルトはこれらを対象とする自然科学の「夜の側面」の重要性を説き、「自然という書物」を解説しようとする。14回の講義録からなるシューベルトのこの著作の第1回目の講義でシューベルトは次のように述べている。

つまりこれから始まる一連の夕べの集いで私たちは、これまで注目されることのまれであった自然科学のあの夜の側面を、一般により承認されてきたその他の対象に勝るとも劣らぬ真剣さで観察することになるのです。いわゆる奇蹟信仰の一種に分類されてきたそれらの対象から、さまざまなものを取り上げることになるのです。

Wir werden nämlich in diesen Abendstunden, jene Nachtseite der Naturwissenschaft, welche bisher öfters außer Acht gefallen worden, mit nicht geringerem Ernst als andre allgemeiner anerkannte Gegenstände betrachten, und von verschiedenen jener Gegenstände [sic!] die man zu dem Gebiet des sogenannten Wunderglaubens gezählt hat, handeln.¹⁶⁾

フェヒナーが「暗黒観」(Nachtsansicht)と呼ぶ実証主義的で唯物論的な自然科学はシューベルトでは「昼の側面」(Tagesseite)になり、シューベルトが「夜の側面」(Nachtseite)と呼ぶ自然の神秘を解読するための方法論は、フェヒナーにおいては「光明観」(Tagesansicht)に近づく。ただし注意しなくてはならないのは、フェヒナーの光明観はオカルト的なものではなく、「精神物理学」という、測定や再現が可能な自然科学に基づき、そこから思弁されたものであるという点である。たしかにフェヒナーを、シューベルトらロマン主義的自然研究者の直系の嫡子と呼んでも差し支えないであろう¹⁷⁾。しかしフェヒナーのこの著書がシューベルトの『自然科学の夜の側面についての見解』の直接的な影響下にあるのではないかというアーレントの推論は、やや行き過ぎであるように思われる。

ハルトマン批判、あるいはシューベルトからの影響に関しては上記にとどめる。フェヒナーが『光明観と暗黒観の相克』の執筆に至ったより直接的な動機は、とりもなおさず友人、知人からの勧めであった。なかんずく1875年にヴィーンからライプツィヒのフェヒナーのもとへやって来たある学生は、老フェヒナーにこれまでの著作を総括するような著作の執筆を熱心に勧めている。学生の名はジークフリート・リピナー (Siegfried Lipiner 1856-1911) といった。

リピナーはガリツィア出身のユダヤ人で、ヴィーンではブレンターノのもとで哲学を学んでいた¹⁸⁾。ブレンターノはフェヒナーとの間に感覚の計測に関する書簡を交わしていたが、リピナーはブレンターノを通じてフェヒナーに興味をもつこととなったようである。ライプツィヒにやってきたリピナーは当地の知的サークルで頭角を現すが、同級の友人たちとはあまり付き合わず、ローゼンタール¹⁹⁾での老フェヒナーの散歩にしばしば同行し、友人たちを驚かせたと言う²⁰⁾。リピナーはフェヒナーの『ツェント・アヴェスター』を読み、またフェヒナーと会話を交わすうちに、自らの思想を分かりやすくまとめた本の執筆を老フェヒナーに勧めたらしい。またリピナーが著した5篇の長大な詩から成る作品『戒めを解かれたプロメテウス』²¹⁾には、特に『ツェント・アヴェスター』からの影響を見ることができる²²⁾。

なおリピナーはリヒャルト・ヴァーグナーやニーチェその人にも『戒めを解かれたプロメテウス』を送り、後者からは当初、好意的な評価を得た。

またニーチェの友人であるエルヴィン・ローデやパウル・ナートルブとも個人的なコンタクトがあった。またリピナーは一時期²³⁾、フロイトと共同で哲学雑誌を出し、さらにグスタフ・マーラー²⁴⁾とも近い関係にあった²⁵⁾。フロイトやマーラーがフェヒナーの著作に大いに関心を示したのも、リピナー抜きには考えられない。このようにリピナーは、後にヴィーンでフェヒナーの思想が注目されるに当たって大きな役割を演じたのであるが、この詳細についてはしかし別稿で論じたい。

フェヒナーはともかく、1876年7月に『光明観と暗黒観の相克』の執筆を開始した。77年、78年の間、原稿の執筆は、他の原稿の執筆によって、また眼病の回復もままならなかったため、何度も中断された。そしてついに1878年の秋、原稿は完成され、10月18日に出版社へ渡されたのである。

2. 光明観と暗黒観

第1部「根本的特徴」(Grundzüge)、第2部「展開」(Ausführungen)からなる著書『光明観と暗黒観の相克』の論述は、フェヒナーの他の著書がそうであるように、多岐にわたっており、また80歳という年齢のせいか、フェヒナーが自らの来し方を振り返っている自伝的な記述も散見される。我々の関心はしかしながら、光明観とは何であり、それと相克する暗黒観とは何かを見定めることにある。

第1部第3章「両世界観の根本思想の対比」に、光明観と暗黒観が端的にまとめられた記述がある。フェヒナーは光明観の根本思想として、次の3点を挙げている。

- ①感性的現象は生物以外の世界にも広く存在している (die Ausbreitung der sinnlichen Erscheinung durch die Welt über die Geschöpfe hinaus)
- ②これらの現象は一つの最高の意識的統一の中に総括され、完結されている (den Zusammenhang und Abschluß derselben in einer höchsten bewußten Einheit)
- ③この2項を媒介する思想として、我々自身の意識が全体的意識、すなわち神の意識と関係し、それに従属している (und den dazwischen vermittelnden Gesichtspunkt, daß unser eignes Bewußtsein dem ganzen, d. i. göttlichen, Bewußtsein zugleich ein- und untertan ist)²⁶⁾

①を敷衍すれば、人間や動物のみならず、植物の「魂」や「精神」といった「感性的現象」、さらには「生物以外」の無機物、地球や惑星といった星辰世界にも「感性的現象」が「単なる仮象ではなく、客観的に世界に広く実在」(nicht bloß Schein, sondern objektiv durch die Welt ausgebreitet ist)²⁷⁾しているということになる。これはフェヒナーが『ナナ』や『ツェント・アヴェスター』で主張してきたことである。②は、それらの全意識の包括者、統一者としての神の要請に他ならない。③はすなわち、前2項からの帰結として、人間の「意識的生活の全体が、一般意識の中に含まれている」(mit beschlossen [sein])²⁸⁾だけでなく、万物に実在するとフェヒナーが言う「感性的現象」が神のその一部であるという万物賦霊論ということになる。かくして、「人間の肉体が外部に現れている全物質世界の部分的存在」であるように、この肉体に属し、内的に現れてくる人間の精神もまた、やはり同じように現れてくる精神的な存在者の一部(Teilwesen)」となる。そして「人間の精神の統一性も、単に神の精神の統一性に従属する部分者(nur ein untergeordneter Bruchwert)であるにすぎない」²⁹⁾と言われる。つまりフェヒナーにとって「我々は神の中に生き、働き、存在しており、神もまた我々の中に生き、働き、存在している(daß wir in Gott leben und weben und sind und er in uns)」³⁰⁾のである。

フェヒナーは他方で暗黒観についても3つの特徴を挙げている。暗黒観の根本思想とは、

- ①'人間や動物の外部における感性的現象を暗黒と見る(die Nacht der sinnlichen Erscheinung über Menschen und Tiere hinaus)
- ②'神を——まだそれが信じられているとすれば——感性的現象界および生物の世界から超越したものと考える(die Überhebung Gottes, falls noch an Gott geglaubt wird, über die sinnlich erscheinende und geschöpfliche Welt)
- ③'人間と神とを外部的に対立させ、あるいはさらに進んで、神を単なる人間の理念として、その上位に人間を置こうとする考え(die äußerliche Gegenüberstellung des Menschen gegen Gott oder gar Überhebung des Menschen über Gott als einer bloß menschlichen Idee)³¹⁾

①'は光明観の①の裏返しであり、一般に精神生活が存在するとされる人間と動物以外に「感性的現象」を認めない、近代自然科学の考え方である。②'は神と自然の分離を意味する。③'は神学的な問題に帰着するであろう。

フェヒナーによれば、光明観は他にいくつもある考え方の一つではなく、原理的に「他の一切の考え方に対立する唯一の思想 (*eine* [Ansicht] *allen gegenüber*)」³²⁾である。逆に暗黒観は、統一的な思想ではないという意味で、他にいくつもある考え方の「一つ」ではない。暗黒観には神を排除する近代自然科学も、神をまだ温存している既成の宗教のどちらもが含まれるのである。また唯物論や社会民主主義をもフェヒナーは暗黒観と呼び、神を全否定して、つまりは「光明観を全くもたずしてやっていけるのは、ただもっとも極端な唯物論者や社会民主主義者のみ (... *geht es etwa nur bei den klassesten Materialisten und Sozialdemokraten*)」³³⁾であろうと言う。

フェヒナーは、光明観によって哲学は「新しい土台を与えられ、新しい歩み (*neue Wandlungen*) を始めるであろう」、また自然科学は「これまでと同じ確実な方法によって物質世界の探求を続けるであろうが、しかしこの物質界を超えた精神的事物に対する信仰は、自然科学と争うものになるというよりは、それ自身の正しさを裏付ける (*sich unterbauen*) ものとなるであろう」としている。フェヒナーは『ツェント・アヴェスター』においては自然哲学を、『精神物理学原論』においては自然科学を展開し、自らの汎神論的な自然哲学を自然科学によって補強しようと試みたが、ここでは信仰によって自然科学が補強されるという逆のベクトルを示し、自然哲学と自然科学の相補性を強調しているのである。また神学に関しては——既存のキリスト教との関係については次稿で論じることになるが——「光明観の中に己が信仰の原理をも見出すことになるであろう」³⁴⁾と述べている。

上記の「物質界を超えた精神的事物に対する信仰」という文言にもある通り、当然ながらこのような光明観は信仰の問題 (*Glaubenssache*) ではないのか、という疑問がわいてくる。フェヒナーはそれを否定しない。

ただしフェヒナーにおける「信仰」の意味は独特である。フェヒナーにとって重力が全世界に偏在していること、また昔から偏在していたことは「信仰」にすぎない。原子と光の波動が存在していることもまた「信仰」である。歴史に端緒があり、目標があるとされるのも「信仰」であり、それどころか、幾何学における次元の数や平行線の定理も、フェヒナーにとっては「信仰の問題」である³⁵⁾。ものごとを厳密に考えるフェヒナーである

からこそ、「およそ直接経験されたのでないものや、論理的に確定していないものはすべてこれ元来信仰に属する」³⁶⁾ と考えるのである。宗教に関することで証明されたものは何もないし、飼犬が魂をもっているかどうかとも証明できない。太陽が明日も上るかどうかが分らないし、アレクサンダー大王が生きていたかどうかを見た人はいない。「我々は信仰の世界に生き、住んでいる」³⁷⁾ のである。光明観もまたそうである。光明観の諸命題を「ピタゴラスの定理のような確実さをもって」(mit der Sicherheit des pythagoräischen Lehrsatzes)³⁸⁾ 証明することはできない。しかし「信仰とは、最終的な確実性を欠くもののことである」³⁹⁾ とフェヒナーは言う。この言い方を我々は「確実性を最終的に裏付けるものは信仰に他ならない」と逆説的に言い換えることができるのではないだろうか。蓋し「光明観はひとつの信仰論 (Glaubenslehre)」⁴⁰⁾ なのである。

他方暗黒観の哲学においては、知識は知識としてそこにあるのみで、知識が信仰になることは阻止されている。ただし暗黒観も知識の「味気なさ、空虚の矯正物として」(als Korrektiv seiner (=des Wissens: 福元) Trostlosigkeit und Leere) やはり信仰を必要としている。つまり暗黒観の哲学においては、知識が発展し、完成したものが信仰なのではない。知識と信仰は「正しく一つにまとまること」(sich [...] recht zusammenzufinden) ができなかったのである。また神学と自然科学の関係においては、これら知識と信仰の懸隔はさらに拡大し、「神学は神から自然を追放し、また自然科学は自然から神を排除してしまった」([...] daß die eine die Natur aus Gott, die andre Gott aus der Natur ganz ausgeschieden hat)⁴¹⁾ のである。こうして暗黒観の哲学と神学と自然科学の三者は、いずれも相手に不満を感じている。なにかずく哲学は最も、自分自身に「満足しえない状態にある」⁴²⁾ のだとされる。

光明観が一つの信仰であるならば、その神とはどのようなものであろう。フェヒナーの記述をもう少し追ってみる。フェヒナーにとって神とは「その広さにおいても高さにおいても、人間の意識を遥かに抜き出ているような意識をもった唯一」⁴³⁾ のものである。人間や動物の内部における感性的現象はさておき、それらの外部に実在するとフェヒナーの言う感性的現象(例えば植物や星辰の魂)は、「決して虚空に浮かんでいるのではなく」⁴⁴⁾、それらを覆う一つの意識をもった主体を必要とするはずである。フェヒナーのモデルは、人間、動物のみならず、植物、鉱物、星辰にまで至る「精神の下部構造 (de[r] geistig[e] Unterbau) の広がり」に従ってその高さを増

し、無限へと至るようなピラミッドである。イメージとしてとらえるならそれは、さまざまな感性的現象のピラミッドが、ちょうどロシアのマトリューシュカ人形のように入れ子構造になっており、そのもっとも外部（もっともそれが無限大なのであり、神のピラミッドを外部から見ることにはできないのだが）が神の意識のピラミッドである、ということになろう。ここに意識の位階構造を見ることができるのは明らかである。フェヒナー自身「光明観の体系はまったく神政的（theokratisch）」⁴⁵⁾であるという所以である。

それに対して暗黒観においては、「神の意識ではなく、人間の意識の中に最高の意識を認め」ようとする。というのも、暗黒観は人間の意識よりも遥かに広大な意識の存在を「推論する手段をもたない」⁴⁶⁾からである。『光明観と暗黒観の相克』の淵源がハルトマンの『無意識の哲学』批判であったことの痕跡を、この後の記述に見て取ることができる。さらには「概念の哲学」と呼ばれているヘーゲルや、ライプニッツのモノイド論、またマルクスの唯物論も、暗黒観の哲学の範疇に分類されることとなる。

こうして無意識の哲学は、我々の意識を上から覆う神の一般意識の中ではなく、下に広がっている一般意識の中に、諸々の精神を結ぶ絆（Band）を求める。この無意識は意識と似たような神秘的特質をもっているが、しかし意識の特質と同じではないとされる。概念の哲学にとってこのような絆は、人類の精神、つまり歴史にあるとされるが、現実には何らそれを支持する点（Anhaltspunkt）をもたないにもかかわらず、歴史が織りなす個々の網目（Masche）の中にあらゆる精神を結合する意識を求めようとするのである。モノイドの哲学は原子（Atomen）の中にこの絆を求めようとするし、空虚な唯物論に至っては、魂の絆は魂と魂の間にある物質にあるとされる。⁴⁷⁾

フェヒナーはこの後で哲学的な議論を続けていないが、それはこれら暗黒観の哲学と光明観が全面的に対立する、まったく異なる考え方であり、それゆえこれ以上の立ち入った論争は無益であり、不要であると考えからである⁴⁸⁾。いずれにせよ光明観は「天空や太陽、月、稲妻や雷鳴」は人間よりも前から存在していたのであり、そのような「神の精神で満たされた世界」が人間を生んだ、と考えるのである。フェヒナーの世界観は次の一

節に集約されている。

真実はこうである。一切の人間が存在するよりも前に、神の精神で満たされた世界 (mit göttlichem Geiste erfüllte Welt) があって、これが人間を生んだのである。しかもその際、世界はその共同体から人間を解放 (entlassen) したのではなく、その後もこの自らの子供 (Sproß) にして部分である人間に影響を与えつつ教え育てて (wirkte fortbildend) きた。人間はまた世界へ働きかける。それはいわば、上から下へ、下から上へ、そしてあらゆる方面からなされる互いに関連する相互作用の営みであり、これによって世界は一切をその関連において把握し保持する一般的精神 (= 神の精神: 福元) の影響下で生成するのである。⁴⁹⁾

この後もフェヒナーは、上記の内容を敷衍するとともに、これまでの著作で縷々述べてきた見解を反復している。曰く「この世において外面的に現れるものは、神においてはすべて内面的に含まれている」⁵⁰⁾、あるいは神とは「世界全体を統一し、これに魂を吹き込み、その隅々まで働きかけるような精神的存在者」([ein] die Welt im ganzen einigende[s], beseelende[s], durchwirkende[s] geistige[s] Wesen)⁵¹⁾ である、等々。また星辰は「かつては神であり天使であった」(einst Götter und Engel) とされ、植物は「我々に笑いかけているように見える」⁵²⁾。しかるに暗黒観にとっては、星辰は足下に踏みつけている「死せる土塊」(tote Klumpen)⁵³⁾ にすぎず、植物にしてもただそれが生きていることが認められているに過ぎない、云々。またフェヒナーは、これらの見解を述べた著書『ナナ』や『ツェント・アヴェスター』が世に受け入れられなかったことを回想し、やや自嘲的にこれらの書物がたどった運命を想起している。

星辰や植物に魂があるなどと主張した書物はひどい目にあわされた。つまり一方では唯物論者たちにひっぱられ、他方では観念論者たちにこづきまわされ、そして自然研究者 (Naturforscher) からは永遠に排斥されながら、二束三文で (zum Spottpreis) 叩き売られ、反故紙にされ、結局のところ野垂れ死にしてしまったのである。その理由は、光明観から見れば自明のことが、暗黒観から見ればばかげたこと (absurd) だからだ。つまり暗黒観から見れば、非常に多くの事柄が自明なほど

ばかげて見えるからである。⁵⁴⁾

それでもフェヒナーは星辰の世界に関する自説を、この著書においても再説している。フェヒナーは『ツェント・アヴェスター』における地球と人間のアナロジー⁵⁵⁾を再び取り上げる。昼と夜の交代は人間の覚醒と睡眠に当たる、海洋の河川の流れは血液の流れに、潮の満ち干は心臓の脈拍に相当する、地表を覆う緑の植物は感覚をもつ皮膚であり、大気は人間で言えば肺に他ならない。また交通手段が発達し、文化の媒介物や文化的所産が交流することを神経の発達になぞらえる⁵⁶⁾。また星辰どうしは「ただ光と重力を通じてのみ語り合う」(nur noch durch Licht und Schwere miteinander [sprechen])⁵⁷⁾。また地球と人間の関係がそうであるように、「どの星辰に棲む生物も、自己の星辰を己より高い段階としてもつ」、つまり「生物はその意識と共に、より一般的な星辰の意識のモメントとして、その中に入っている」⁵⁸⁾という主張に至っては——「どの星辰に棲む生物も」とはいったい何を指しているのであろう——いささかSF的であると言わざるをえない⁵⁹⁾。ただフェヒナーの思考法は主としてアナロジーであり、地球以外の星辰についても、地球のアナロジーからの記述であって、宇宙人の存在を真面目に説いているわけではあるまい⁶⁰⁾。とにかく「意識の絆は全宇宙に遍及んでおり、地球はただ他の諸星辰との対比において、一般的意識圏の中から自己の特殊な意識圏を切り取っているにすぎない」⁶¹⁾ことになる。つまり星辰も神の意識の大ピラミッドの中にすっぽりと含まれており、その中に地球の精神が含まれ、さらにその中に人間を含めた地球上の万物の精神が含まれるという神の位階、テオクラシーがモデルとして打ち出されるのである。

フェヒナーはさらに、1836年に書いた『死後の生活に関する小冊子』から『ツェント・アヴェスター』、加えて『精神物理学原論』の物心並行論、またマイヤー／ヘルムホルツの「エネルギー保存則」を援用し、彼岸における魂の不死を自然科学的に根拠づけようとする。

暗黒観によれば、「意識は各人の周りで断絶 (rings um jeden [abbrechen])」⁶²⁾しており、死ねば当然ながら意識もそこで断絶するとされている。暗黒観はつまり、彼岸における魂の生活を否定するか、あるいは「死語の生活」を真面目に取らず、「誰でも自分の好きなことを信じることがで

きる」(jeder kann glauben, was er möchte)⁶³⁾と突き放すかのいずれかであるとフェヒナーは言う。

前者、すなわち彼岸を否定する場合にも、二つの方向性がある。「唯物論的に、魂は肉体とともに滅びる」と考えるか、あるいは「観念論的に死後は魂が一般精神に吸収される」⁶⁴⁾と考えるのである。注意すべきは、暗黒観＝唯物論ではないということである。観念論もまた、さらにはドグマ的な信仰もまた、暗黒観とされている。要するにフェヒナーの言う光明観のみが唯一の思想であり、それ以外の考え方のすべてが暗黒観に属するのである。

光明観における彼岸は「ただ、すでに此岸において神の中で営まれていた生活の拡大(Erweiterung)であり、向上(Steigerung)であるにすぎない」⁶⁵⁾。光明観においては、此岸と彼岸は連続性の相でとらえられているのである。フェヒナーは此岸における人間の意識が拡大され、向上した形で内包されるような、一般的な意識生活が彼岸にあるとする。フェヒナーの記述を補足しながらその「自然科学的根拠」の理路をたどると、以下のようになるであろう。

あらゆる現象の背後には、必ず物質的基盤があるはずである。それは感性的現象についても例外ではない。たとえば思考や記憶、快や悲哀といった感情にも、何らかの物質的基盤があるに違いない。フェヒナーはこれを「此岸における靈魂の生命は、何らかの物質的事象に拘束されているはずである」⁶⁶⁾と表現している。これはとりもなおさず物心並行論(Parallelismus)を指す。快や悲哀、あるいは記憶や夢といった現象を物質面から、つまりは脳内物質やシナプスへの何らかのインパルス(活動電位)といった面から解明しようとする最新の脳科学は、フェヒナーと問題意識を共有していると言わざるをえない。フェヒナーの「精神物理学」(Psychophysik)とはまさに、この精神と物理との関数関係を解明しようとして創始された学であり、それが実験心理学の端緒となったことはすでに論じた⁶⁷⁾。

一方、物質的事象は消滅するときに「必ず何らかのそれに続く事象に移り行く」⁶⁸⁾はずである。これは周知のようにマイヤーやヘルムホルツらの主張する「エネルギー保存則」に他ならない。そうであるとすれば、物質的基盤をもつ我々の感性的事象は、肉体の死後も消え去るはずはない。「我々の死後、このような物質的事象の結果がどこに見出されるにしても、あるいはそれを見出すことが不可能だとしても、ともかくその結果はどこかに

必ず存在しなくてはならない」⁶⁹⁾のである。もっともフェヒナーは「実際のところ、此岸の物質的事象についても、それを彼岸にまで存続させる (ins Jenseits fortsetzend) 物質的事象についてもほとんど知らない」⁷⁰⁾としている。この「物質的事象」、快や悲哀、あるいは記憶や夢の背後にある「物質的事象」については、フェヒナーのこの本から130年以上後世に生きている我々もまた解明していないのである。

しかし、とフェヒナーは問う。そのような物質的事象は「我々の死に影響されず、より広く、より高度で、より一般的な意識を担う全体者の中でなくして、どこに見出されるであろうか」⁷¹⁾。我々はもちろん自分たちの「此岸での生命の物質的結果を[...]此岸を越えて追跡することはできない」⁷²⁾が、光明観ではこう語られる。

この全体者なるものに我々はすでに此岸において霊肉ともに属しており、また彼岸においても、我々はその存在形式を異にするだけで、やはりこの全体者に属し、そして新しい仕方ですその生命の継続に寄与しているのである。⁷³⁾

精神と肉体は、物心並行論においては表裏一体となる。つまり「人間の精神はその結果を一般的精神の中に残し、またこの精神を担っている人間の肉体は、一般的物質界の中にその結果を引き継いでいる」⁷⁴⁾ということになる。フェヒナーは「弦の音は消えゆき、音色は空中に漂い去っていく」が「これこそ此岸と彼岸の関係を一番簡単に表現したものだ」と言う。音色は空気一般性の中に解消するのではなく、拡散し、「自己の独自性を完全に保ちながら、他の音色と混交してもっと高次の音色を作り出す」⁷⁵⁾のである。またフェヒナーは1836年、35歳の時に執筆した『死後の生に関する小冊子』の内容——人は三度生きる、第一段階（生前）は絶えざる睡眠、第二段階（此岸）は睡眠と覚醒の交代、第三段階（彼岸）は永遠なる覚醒である——を反復し、「彼岸の意識を見つけ出すためには、まず此岸の意識を、いや意識する能力を失わねばならない。それはちょうど生まれる前の胎児が、その第二の生命のための諸条件をすでに造り出しているながら、この第二の生命を手にするためには、まず第一の生命を失わねばならないのと同じである」⁷⁶⁾と言うのである。

以上をまとめておこう。光明観とは何か。それを端的に言うなら、人間はもとより動植物を含めた生物界、さらには地球や惑星からなる星辰界、また無機物をも含めた万物、すなわちあらゆる自然の体系が、ことごとく神によって賦霊されて (beseelt) いる、つまり万物には神の意識が分与されているという汎神論の世界観であると言えるであろう。人間の個々の意識ないし魂は、より高く広い神の意識に従属しており、それは肉体の死後も神の全体意識の中へと糾合され、そこで存続し続ける。人間と神との関係は「部分 (Teil) と部分」「段 (Stufe) と段」ではなく、「部分と全体 (das Ganze)」「段と階段 (Treppe)」⁷⁷⁾ との関係となる。光明観とはすなわち「我々自身が神の息吹、一小部分、一つの小さな段であり実証 (ein Hauch, ein kleiner Bruchteil, eine kleine Stufe und Probe)」⁷⁸⁾ であるような世界観なのである。

他方暗黒観の基調は、悲観主義と否定にあり、そこでは神と世界、肉体と魂は分離されたままで、それらの合一という神秘体験は幻想にすぎないとされる。神は完全に否定されるか、あるいは此岸と分断された彼岸に閉じ込められてしまう。フェヒナーにとっては唯物論、実証主義的自然科学はもとより、科学主義的認識論を奉じる新カント主義、さらにはショーペンハウアー、あるいはハルトマンらのペシミズム哲学も暗黒観に支配されていると映った。また無神論のみならず、正統派福音協会のドグマ的な神学もまた、暗黒観の範疇にあった。

それではフェヒナーの神とキリスト教の神はどのような関係にあるのか。また『光明観と暗黒観の相克』という著作に対する当時の反応はどのようなものであったのか、ひいてはフェヒナーの思想全体が当時どのような位置を占めていたのか。そしてこのようなフェヒナーの世界観は後世にいかなる影響を及ぼしたのか。これらの残された課題については、稿を改めて論じる。

(続)

(本稿は JSPS 科研費24520362の助成を受けたものです)

注

- 1) 本稿で用いたのは Gustav Theodor Fechner: *Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht*. 2. Auflage. Breitkopf und Härtel, Leipzig 1904. がアメリカでスキャンされた版 (BiblioBazaar,

2010)である。このスキャン本には落丁があるが、その部分は他の版を見て確認した。なお本書にはかなり古いものだが邦訳がある。フェヒネル：『宇宙光明の哲學・靈魂不滅の理説』上田光雄訳、光の書房、昭和23年。このうち「宇宙光明の哲學」が『光明觀と暗黒觀の相克』に、「靈魂不滅の理説」が『死後の生に関する小冊子』（*Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*, Insel, 1836）に当たる。なお翻訳作業のほとんどは上田氏ではなく、「日本科學哲學會翻譯部員」である水野不二夫氏の「絶大なる努力が基底となっている」という。本稿はこの翻訳本から多大な恩恵を受けている。

- 2) Gustav Theodor Fechner: *Tagebücher 1828 bis 1879. Teilband II*. Hg. von Anneros Meischner-Metge. Bearbeitet von Irene Altmann. Verlag der Sächsischen Akademie der Wissenschaft zu Leipzig, in Kommision bei Franz Steiner Verlag Stuttgart, Stuttgart 2004. S. 1132. 1878年10月18日付の日記にはこう記されている。„... meine in mehreren Schrift zerstreuten philosophisch-religiösen Ansichten in einer besonderen Schrift zusammenzufassen [...]“.
- 3) Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. Peter Lang. Frankfurt am Main 1999. S. 219.
- 4) 「フェヒナーにおけるモデルネの『きしみ』——グスターフ・テオドル・フェヒナーとその系譜(2)——」(『言語文化論究』第26号, 九州大学言語文化研究院, 2011年, 1-21頁)においては1848年の著作 *Nanna oder Über das Seelenleben der Pflanzen*. を, また「『ツェント・アヴェスター』における賦靈論と彼岸——グスターフ・テオドル・フェヒナーとその系譜(3)——」(『言語文化論究』第28号, 九州大学言語文化研究院, 2012年, 121-134頁)においては1851年の著作 *Zend-Avesta oder über die Dinge des Himmels und des Jenseits. Vom Standpunkt der Naturbetrachtung*. を取り上げた。またこのシリーズの(4)に相当する「『精神物理学原論』の射程」(『西日本ドイツ文学』第24号, 日本独文学会西日本支部, 2012年, 13-27頁)においては, フェヒナーが自らの哲学的-宗教的な思想を自然科学的に根拠づけようと試みている1860年の著作 *Elemente der Psychophysik*. を論じた。これらの拙論はいずれもオンラインで閲覧可能である。
- 5) Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner*. a. a. O., S. 216. さらには Michael Heidelberger: *Die innere Seite der Natur. Gustav Theodor Fechners wissenschaftlich-philosophische Weltauffassung*. Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M. 1993. S. 87.
- 6) ハルトマンの哲学に関する概説書として以下の本を参考にした。浩瀚で複雑な『無意識の哲学』の概要を把握することは、この本なくしては論者の手に余った。上田光雄：『ハルトマンの無意識の哲学』世界哲學講座(4), 日本科學哲學會ロゴス自由大學刊行, 光の書房, 昭和23年。これもまた上田光雄氏の仕事であるが、この概説書も水野不二夫氏の「熱心なる協力」によって成ったものであるという。同書「はしがき」を参照。
- 7) たとえば森鷗外は、ドイツ留学時代と帰国後の自分を *Selbstironie* を込めて観察した『妄想』(明治44年)に、以下のように書いている。「哲學の本を讀んで見ようと思ひ立て、夜の明けるのを待ち兼ねて、Hartmann の無意識哲學を買ひに行った。[...]

- なぜハルトマンにしたかといふと、その頃十九世紀は鐵道とハルトマンの哲學とを齎したと云った位、最新の大系統として賛否の聲が喧しかつたからである。』『鵬外全集』第八卷、岩波書店、203頁以下。
- 8) 鵬外もハルトマンのこのような主張を「錯迷の三期」として簡潔にまとめている。「ハルトマンは幸福を人生の目的だとする事の不可能なのを證する爲めに、錯迷の三期を立ててゐる。第一期では人間が現世で福を得ようと思ふ。少壯、健康、友誼、戀愛、名譽といふやうに數へて、一々その錯迷を破つてゐる。[...]第二期では福を死後に求める。これには個人としての不滅を前提にしなくてはならない。ところが個人の意識は死と共に滅する。[...]第三期では福を世界過程の未來に求める。これは世界の發展進化を前提とする。ところが世界はどんなに進化しても、老病困厄は絶えない。[...]初中後の三期を閱し盡しても、幸福は永遠に得られないのである。』『鵬外全集』同上書、204頁。
- 9) Eduard von Hartmann: *Philosophie des Unbewussten*. 6. Aufl. Carl Dunckers Verlag, Berlin 1874. S. 343.
- 10) Ebd., S. 345.
- 11) Vgl. Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner*. a. a. O., S. 216. および Michael Heidelberger: *Die innere Seite der Natur*. a. a. O., S. 87.
- 12) Gustav Theodor Fechner: *Tagebücher 1828 bis 1879. Teilband II*. a. a. O., S. 980.
- 13) Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner*. a. a. O., S. 216.
- 14) Gustav Theodor Fechner: *Tagebücher 1828 bis 1879. Teilband II*. a. a. O., S. 1132.
- 15) 夢についてはシューベルトの代表的な著作『夢の象徴学』(*Die Symbolik des Traumes*. Bamberg 1814. 邦訳『夢の象徴学』深田甫訳、青銅社、1976年)に詳しい。
- 16) Gotthilf Heinrich Schubert: *Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft*. Nachdruck der Ausgabe Dresden, in der Arnoldischen Buchhandlung, von 1808. Hg. von Heike Menges. Verlag Dietmar Klotz. Eschborn 1995. S. 3. テキスト自体はグーグル・ブックのオンラインで読むこともできるが、資料的価値が高いので、原文を付した。
- 17) シューベルトの有機的宇宙観、森羅万象を生命ある統一とみなす宇宙観、神秘的な夜の世界への傾斜などがドイツ・ロマン派に決定的な影響を与えたこと、特に E. T. A. ホフマンはシューベルト抜きには考えられないことは、つとに指摘されている。(Vgl. Ernst Busch: „Die Stellung Gotthilf Heinrich Schuberts in der deutschen Naturmystik und in der Romantik.“ In: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*. 20. Jg. Max Niemeyer, Tübingen 1942. S. 305ff. ホフマンについては S. 310.) したがって、ロマン派への傾きをもつフェヒナーもシューベルトの影響下にあるということ是可以する。
- 18) Michael Heidelberger: *Die innere Seite der Natur*. a. a. O., S. 87.
- 19) ライプツィヒ市内にある広大な緑地。『ナナ』や『光明観と暗黒観の相克』の冒頭では、フェヒナーのローゼンタールにおける万物照応の「神秘体験」が語られている。西田幾多郎も明治44年に上梓した『善の研究』の版を昭和11年に改める際、フェヒナーのこの「神秘体験」に言及している。詳細については、エッセーではあるが、福元圭太:「ライプチヒのフェヒネル」『らてるね』107号、2012年春号、同学社、

9-11頁を参照。

- 20) Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner*. a. a. O., S. 216.
- 21) *Der entfesselte Prometheus. Eine Dichtung in fünf Gesängen*. Breitkopf und Härtel, Leipzig 1876. この作品はヴィーン在住の作家・詩人・劇作家であり、「若きドイツ派」(Junges Deutschland)の一員でもあったハインリヒ・ラウベ (Heinrich Laube 1806-1884) に献じられている。
- 22) Vgl. Michael Heidelberger: *Die innere Seite der Natur*. a. a. O., S. 88. Anm. 192.
- 23) 1874年から1875年にかけて。
- 24) リピナーはヴィーンでいわゆる「リピナー・サークル」(Lipiner-Kreis) の中心となり、マーラーもそこに加わっていた。リピナーは禁欲主義的な「共感宗教」(Mitleidreligion) を奉じ、厳密な菜食主義を取り入れた。リピナーとマーラーの関係が破綻したのは、マーラーとアルマとの結婚にリピナーが反対したことが原因であった。
- 25) Vgl. Michael Heidelberger: *Die innere Seite der Natur*. a. a. O., S. 87.
- 26) Gustav Theodor Fechner: *Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht*. a. a. O., S. 15.
- 27) Ebd., S. 13.
- 28) Ebd., S. 14. 強調はフェヒナーによる。(原文では隔字体。以下同様。)
- 29) Ebd., S. 14.
- 30) Ebd., S. 14.
- 31) Ebd., S. 15.
- 32) Ebd., S. 15. 強調はフェヒナーによる。
- 33) Ebd., S. 15. フェヒナーは政治的には非常に保守的であり、革命的なものを一切受け付けなかった。当時はまたビスマルクによる社会民主主義者への弾圧が盛んであった。
- 34) Ebd., S. 17.
- 35) Vgl. Ebd., S. 17.
- 36) Ebd., S. 17f.
- 37) Ebd., S. 18.
- 38) Ebd., S. 18.
- 39) Ebd., S. 18.
- 40) Ebd., S. 19.
- 41) Ebd., S. 19.
- 42) Ebd., S. 19.
- 43) Ebd., S. 21.
- 44) Ebd., S. 21.
- 45) Ebd., S. 21.
- 46) Ebd., S. 21.
- 47) Ebd., S. 22. 強調はフェヒナーによる。
- 48) Ebd., S. 22.
- 49) Ebd., S. 23.
- 50) Ebd., S. 25.

- 51) Ebd., S. 29.
- 52) Ebd., S. 29.
- 53) Ebd., S. 29.
- 54) Ebd., S. 29.
- 55) Vgl. Gustav Theodor Fechner: *Zend-Avesta oder über die Dinge des Himmels und des Jenseits. Vom Standpunkt der Naturbetrachtung*. 2. Aufl. Erster Band. Verlag von Leopold Voß. Hamburg und Leipzig 1901. S. 42ff.
- 56) Gustav Theodor Fechner: *Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht*. a. a. O., S. 33f.
- 57) Ebd., S. 31.
- 58) Ebd., S. 31.
- 59) フェヒナーに関する定評ある伝記を書き、20世紀初頭にフェヒナーが再度読まれるのに一役買ったクルト・ラスヴィッツ (Kurd Laßwitz) はドイツで最初のSF作家とされる。ラスヴィッツのフェヒナーへの興味があるいはこの面から惹起されたのではないかと考えることも可能であろう。フェヒナーの伝記とは以下を指す。Kurd Laßwitz: *Gustav Theodor Fechner*. Frommanns Klassiker der Philosophie. Hg. von Richard Falckenberg, Bd. 1. Frommann, Stuttgart 1896.
- 60) もっともこれも実証されていないのであるから、フェヒナーにとっては「信仰の問題」となるであろう。
- 61) Gustav Theodor Fechner: *Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht*. a. a. O., S. 36.
- 62) Ebd., S. 38.
- 63) Ebd., S. 38.
- 64) Ebd., S. 38.
- 65) Ebd., S. 39.
- 66) Ebd., S. 39.
- 67) 注4に挙げた福元圭太:『『精神物理学原論』の射程』を参照されたい。
- 68) Gustav Theodor Fechner: *Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht*. a. a. O., S. 39.
- 69) Ebd., S. 39.
- 70) Ebd., S. 40.
- 71) Ebd., S. 40.
- 72) Ebd., S. 40.
- 73) Ebd., S. 40.
- 74) Ebd., S. 40f.
- 75) Ebd., S. 41.
- 76) Ebd., S. 42.
- 77) Ebd., S. 16.
- 78) Ebd., S. 16.

Zur Auseinandersetzung zwischen „Tagesansicht“ und „Nachtansicht“ bei Gustav Theodor Fechner

— Gustav Theodor Fechner und seine Genealogie (5) —

Keita FUKUMOTO

In seinem späten Werk *Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht* (1879) versucht Gustav Theodor Fechner, seine bisher „in mehreren Schriften zerstreuten philosophisch-religiösen Ansichten in einer besonderen Schrift“ zusammenzufassen. Die Lektüre dieses Buchs ermöglicht uns daher, ein Gesamtbild seiner philosophisch-religiösen Ansichten zu gewinnen. Fechner selbst benennt seine philosophisch-religiöse Weltanschauung mit dem Begriff „Tagesansicht“ und stellt ihm den Begriff „Nachtansicht“ gegenüber.

Bei der Tagesansicht seien die sinnlichen Erscheinungen „durch die Welt über die Geschöpfe hinaus“ ausgebreitet. Diese Erscheinungen seien „in einer höchsten bewußten Einheit“ abgeschlossen. Fechner setzt einen „dazwischen vermittelnden Gesichtspunkt“ voraus und betont, dass das Bewusstsein oder die Seele aller „dem ganzen, d. i. göttlichen, Bewußtsein zugleich ein- und untertan“ sei. Die „Tagesansicht“ lässt sich daher als pantheistische Allbeseelung der Welt charakterisieren.

Demgegenüber verneint die „Nachtansicht“ die sinnlichen Erscheinung „über Menschen und Tiere hinaus“ und hält Gott für transzendental „über die sinnlich erscheinende und geschöpfliche Welt“, vorausgesetzt dass „noch an Gott geglaubt wird“. Dabei werden die Menschen Gott gegenübergestellt oder sogar „über Gott als eine bloß menschlichen Idee“ gestellt.

Man kann natürlich nicht „mit der Sicherheit des pythagoräischen Lehrsatzes“ beweisen, ob die „Tagesansicht“ wahr ist oder nicht. Dieser Tatsache ist sich Fechner durchaus bewusst und bezeichnet seine „Tagesansicht“ daher als eine „Glaubenslehre“. Nach Fechner ist es der Glaube, „was an der letzten Sicherheit noch fehlt“. Paradoxerweise könnten wir den Satz aber

folgendermaßen umschreiben: „Nur Glaube kann die letzte Sicherheit zuerkennen.“